寄稿について前書き

学長　森田亀之助

前々から本学学報に何か寄稿したい考へはあつたが，正直のところ，学長の職務も，色々公用雑務があつて，傍から見る程閑散ではないので，何か特別に執筆する機会は中々ない。

だが，私の過去の論文，講演筆記等で既に活字になつたものは，今日迄に随分沢山ある。戦禍で手持ちのものは全部烏有に帰したが，それでもその後，知人から，登載刊行物を教へてくれたり，原物を寄贈してくれたり，自分で見つけて購入したりして大分回収できた。序だから，自分の記憶のために，書かしてもらへば，最近でも，『白樺』第一巻八号（明治四十三年十一月十四日刊行）に拙稿「ロダンの芸術」が登載されていることや，又，東京のブリヂストーン美術館図書室に，私が頻繁に寄稿した『美術新論』が一二欠本があるが，大部分保管されているのを知り，大いに欣んでいる次第です。

そんな旧稿でよかつたら，手許にも幾らもある。然し，こんな古ぼけた年代のものでは，と一時は考へたが，又，再考してみると，却つてそんなものも骨董的趣味もあつて面白いかも知れないと思つたから，中古３の講演筆記をお眼にかけることにきめた。

けれど，折角，我が大学学報に始めて，蕪稿を掲載するのだから，大したものでなくとも，近い頃書いたものも，一二，出してもらうことにしました。

それは左の通りです。

第一，偽物談議。

第二，哲人に芸術なし。

第三，私の書道観。

一々の原稿に就ての因縁は，それぞれの題目の前に説明します。

〔第二のものは，本来「古代芸術と子供の絵」（大正十一年，東京美術学校に於ける公開講演筆録で，同校校友会誌に連載されたもの）を出すつもりでした。この方が多くの人に読んでもらえる筈ですが，講演筆記が甚だ杜撰で，之を校訂することは，頁数も多いので大仕事になりますから，之はあきらめ「哲人に芸術なし」を差しかへることにしました。然しこれも私にとつて記念的なものです。〕